

検閲をかいくぐり、真実を映し出す

ARTIST FOCUS

アミール・レザ・コヘスタニ [P.14]

「演じる」事は大きな嘘だと言われているわね。
役者は観客に嘘を言っていない。
役者として自分に嘘をついている。
私みたいな役者もいる。
「役」はどのくらい自分に近いかを確かめたい。
結構、危険だけど。
役者の私は自分に嘘をつくためにギャラを貰っているわけ。

—「1月8日、君はどこにいたのか?」より抜粋(訳: ショーレ・ゴルパリアン)

若干22歳にしてイラン国内の権威ある賞を受賞(ファジル演劇祭)、近年はヨーロッパを中心に高い評価を得る劇作家・演出家アミール・レザ・コヘスタニが、厳しい検閲をくぐり抜け、現代イラン社会のタブーに斬り込む。2009年6月のイラン大統領選挙と、その不正疑惑への激しい抗議活動を下敷きにした意欲作『1月8日、君はどこにいたのか?』は、6人の男女の携帯電話による会話劇からなる。1月8日の夜、ジャン・ジュネの『女中たち』の稽古に集まった彼らの、翌朝に起きたある事件をめぐるやりとり、隠語や嘘にまみれた会話から浮かび上がる真実とは……。



検閲をかいくぐり、真実を映し出す会話劇

アミール・レザ・コヘスタニ
Amir Reza Koohestani

インタビュー・文：ショーレ・ゴルパリアン
Interviewed by Shohreh Golparian



© Mohammadreza Soltani

劇作家・演出家アミール・レザ・コヘスタニは英国留学中に2009年6月のイラン大統領選挙とその不正疑惑への激しい抗議活動をテレビで知った。当事者でない彼がいかにその真実に迫れるのか。コヘスタニは選挙後のテヘランの現在に、その痕跡を見出し、真実をたぐり寄せようとする。09年にテヘランで初演後、世界6ヶ国で上演され好評を博した『1月8日、君はどこにいたのか?』が待望の来日公演を果たす。

告発一步手前の“状況”を説明する

世界的に評価が高いイラン映画と同様、演劇はイランの生活に欠かせないエンターテインメントだ。首都のテヘランにはあちこちに劇場があり、今でもシティー・シアターの前には、西洋の有名な脚本やイラン社会問題を題材にした話、または評判のいい原作を元にしたイラン演劇を観ようとチケットを買い求める若者が集まる。

一方、イランでは、演劇にも映画と同じく検閲があり、自由に表現できないことが多い。コヘスタニは他の作家が検閲を恐れて表現できないことを上手く台詞にし、綱渡りのような演出をする。

「イランの文化および政治の状況により、人々が明らかに答えをわかっている問題を、演劇で表現することは容易ではない。疑問を投げかけることすらも簡単ではないのです。私たち劇作家に残る最後の方法は、疑問が発生する一步手前の状況を説明する事なのです。ある問題を直接表現するのではなく、その前段階の状況を再現すると、観客は劇作家が問にかけている問題を理解することができる。そうした迂回した表現を施すことで、検閲にさらされる“告発”の痕跡を残さずに伝えることができるのです」

コヘスタニ世代の演劇の特徴は、役者をメインに考えてつくられるイランの伝統的な形式を離れ、役者の演技から生まれる“状況”でストーリーを語る方法にある。

『1月8日、君はどこにいたのか?』では、役者は全てを台詞(声)だけで表現する。手足の動きを使わず、立ち位置も変えず、ひたすら電話の相手に台詞を投げかけるだけで、観客を感動させるのは大変難しい。しかし、本作では巧みな構成と台詞、そして主人公・サラ役のネガール・ジャワヘリアンをはじめとする優れた役者の語りにより、国を越えて、観客に切実な感動を与えることに成功している。

コヘスタニは、この作品を“ある種のルポタージュ”として書いた。ジャーナリズムでは捉えきれないイランの現状、自身が経験できなかったあらゆる出来事を、現在のテヘランの人々を観察することによって記録した。

2009年のイラン大統領選挙

経済問題と外交問題を焦点に、既存の保守派政権と規制緩和や言論の自由を訴える改革派が争った。選挙前の世論調査から改革派有利が伝えられる中、保守派が勝利。選挙開始直後から不正が指摘されるなど選挙をめぐる混乱が広がる。テヘランでは学生を中心とした改革派がイラン革命後最大といわれる数十万人規模の抗議デモを起こし、その波紋は地方都市にまで広がった。対して、政府は改革派の拘束などの弾圧により事態の沈静化を図り、現在に至るまで厳しい取締りを行なっている。



イランの社会状況を映し出す、 巧みな構成と台詞

1月8日、雪が降る真夜中のテヘランの郊外。4人の若い女性がジャン・ジュネの『女中たち』を稽古していた……『1月8日、君はどこにいたのか?』はその晩稽古に参加していた6人の若者たちが繰り広げる携帯での会話からなる。誰が銃を奪ったのか? 何のために? 隠語や嘘が飛び交う思わせぶりの言葉……。

サラからはアレについて連絡がくるはず。
「カツラ」のこと?
そう。あの「カツラ」をソーゴルに渡さないで。
なぜ?
その方がいい。面倒な事になるかも。

© Mohammadreza Soltani

「私は、作家が机に向かってものを書くだけの時代は過ぎてしまったと思う。9.11後、アフガニスタンやイラク、世界各地のメディアから流れるニュースが簡単に手に入るこの時代に、作家は自分の部屋の窓から世界を見ているだけでは作品を書けないのです。メディアで発表されていない事実を知っているのなら、机、紙とペンだけでは不十分で、ドキュメンタリー監督や新聞記者の様に街に出なければならないのです。

メディアの流すニュースが偽りであること、またはメディアが嘘と真実を織り交ぜながら巧妙に語るテクニックを利用し、読者や視聴者を騙していることに気がついたら、自分の信じる事実を自分の目線から語らなければならないでしょう。現代演劇は、従来の演劇の意味を離れ、一つのメディアとなるのです。それは特定の形をもたず、他のメディアの追従を許さない、誠実な人々による、唯一のメディア/方法なのです」

テヘランから東京へ

本作では、イランでしかあり得ない状況——大学のキャンパスに簡単に出入りできないこと。荷物の検査があること。兵士や銃のこと。犬を家の中で飼うのもタブーであるうえ、自由に散歩させることができないこと——が語られる。元交際相手と撮った映像のエピソードを交えながら、誰もが持つ心のゆがみ、迷いや弱さ、復讐心を浮かび上がらせる。

「日本の観客は『1月8日、君はどこにいたのか?』が伝えようとするテーマを自分の生活状況と異なったものだと感じるでしょう。この舞台の登場人物たちが抱く“行きづまり

感”は日本の生活のなかでは感じられないものだと思います。しかし、イランと日本の間に存在している文化的な共通点(先祖、家族、恥辱、東洋の思想など)を考えれば、観客が登場人物を自分の立場に置き換え、彼らの反応と同期する瞬間が生まれると信じています」

(2012年8月 メール・インタビュー
翻訳・構成: ショーレ・ゴルパリアン、椋山由香)

アミール・レザ・コヘスタニ(脚本家・演出家)

1978年イラン生まれ。96年にメヘル・シアター・グループが彼のショート・ストーリーを原作とした舞台を企画。1年間俳優として同劇団に参加した後、劇作に転向。2000年、第18回ファジル演劇祭(イラン)で5部門受賞。02-07年、ヨーロッパ各地で作品を発表、好評を博す。F/T09春には、シルヴァン・モリス(フランス)と平田オリザと共同制作した、3人の演出家による『ユートピア?』を発表。



© Abbas Kowsari

『1月8日、君はどこにいたのか?』
メヘル・シアター・グループ
作・演出: アミール・レザ・コヘスタニ

11月2日(金)~11月4日(日)
於: 東京芸術劇場 シアター・イースト

本作は、コヘスタニが英国滞在中に起こった2009年6月のイランの大統領選と、それに引き続いた市民の激しい抗議運動を受けて創作された。ドラマを構成するのは、6人の男女の携帯電話による会話。1月8日の夜、ジャン・ジュネの『女中たち』の稽古に集まった彼らの、翌朝に起きたある事件をめぐるやりとりは、隠語や嘘にまみれている。だが、その言葉の断片の重なりはやがて、抑圧的な社会や他者への不信任、焦燥に苛まれる若者像を鮮やかに浮かび上がらせる。